

山片蟠桃翁の事蹟

龜田次郎

一

和蘭學發達の歴史は茲に叙述する要がないから省略するが、今自分は其生國を同じうし、而も其郡まで同一である所の一蘭學者で、而も天文學に通曉し、本邦に於ける地動説の創唱者たる山片蟠桃翁の事蹟を述べる事とした。翁の學識は管に洋學に止まらず、尙漢學にも造詣深く、又非常なる經濟學者であつたのである。實に一大偉人で

ある。斯る人物であつたに拘らず、其事蹟は從來世に知られず、殆んど湮没して居たのである。大槻修二氏の『洋學史』や『洋學年表』にも毫も見えて居ないし、又翁の生地たる印南郡内でも知つて居る人は無いといふ有様である。故に『印南郡誌』や『増訂印南郡誌』にも勿論出て居ないのである。去ぬる明治四十二年春大阪史編纂掛主任文學士幸田成友氏から、印南郡役所へ翁の事蹟問合の照會があつたが、其時も餘り要領を得なかつた様である。翁の事蹟は只三四の典籍に散見して居るに過ぎぬ。今自分は近年翁の生地に興き、實地踏査を遂げ、村里の故老の談話を聞き、以て茲に本編を草し、其逸傳を公にした次第である。涉獵搜訪盡さるる所あるは無論である。幸に江湖の示教を得て、遺漏を補ふことが出来たならば、自分の本懷これに若くものあらんやである。只自分は、この湮没せんとせる同郡の不聞學者の逸傳の一斑を世に示せば、望は足るのである。

二

山片蟠桃翁の事蹟は、古く『續近世叢語』に少しく見えて居るに過ぎぬ。『浪花人物誌』、『大日本人名辭書』、『帝國人名辭典』、『加古郡誌』などにも載せてあるが、此等の書、皆共に全く『續近世叢語』の譯文に外ならぬのである。近くは、幸田成友氏の『升屋小右衛門』（明治四十四年大阪）

（朝日新聞所載）土屋元作氏の『新學の先驅』（明治四十四年大阪朝日新聞所載）、大阪市役所出版『大阪市史』にも記してあるが、此三者は見るべき所がある。殊に幸田氏の傳記は、調査も餘程行届いて居る。然し記事に少しく誤謬があるのは、惜しむべきである。

翁の名や字は、『續近世叢語』に、

山片蟠桃、名芳秀、字子蘭、初名有躬、字子厚、後改焉、稱升屋小右衛門。

とある通である。『浪花人物誌』以下の諸書も、また同様である。蟠桃といつたのは、晩年の號で、長壽の意を寓した語であらう。

翁の出生地は、播磨國印南郡神爪村（現今米田村ノ内）であつて、長谷川安兵衛の弟である。これは下記の翁が晩年郷里の人々へ頒與した木杯の文句や、記念墓碑の刻文にも見える。其生家は、屋號を糸屋といつて居た。今日も尙唱へて居る。その家は、神爪村東端北側（現今耕田トナル）にあつた。翁は幼時分家して、同村中國街道南側土橋の側（現今烏居彦二氏宅）で酒屋を營んで居たとの事である。これは其兩親と共に別家して居たのであらう。後上阪したのである。『續近世叢語』に『播磨加古川人』とあるので、後世これを襲用し、去ぬる明治四十四年夏、大阪某新聞社の巡回講演が、加古川町に開催せられ、其折同社記者が、加古川人として翁の事蹟を少しく述べた事があつたが、これが基とな

つて、遂に「加古郡誌」にも載せられ、又同地の人々もこれを信じて居るのであるが、然し今以て頼と翁の生家が明からないとの事である。これはさもあるべき筈で、加古川人といったのは、全く誤である。舊幕時代は勿論、今日でも田舎から他國へ出て行つた者が、早明りのする様に、其附近の都市を出生地と稱するが通例である。神爪村は加古川の西方一里弱の小村であるから、當時驛路として有名な加古川を稱したのであらうと思ふ。誤謬の原由は茲に存するのである。幸田氏の「傳記」や、「大阪市史」は、正しく神爪村としてある。これは同氏が前年調査照會の結果であらうと考へる。

翁は幼年に大阪に出で、初めは今橋三丁目の兩替屋河内屋與兵衛に丁稚奉公をした。生れ付讀書好であつたので、其爲め肝要の用事に間に合はぬことが度々あつた。主人も遂に我慢し切れず放逐した。之を拾ひ上げたのが、同業者梶木町山片氏升屋平右衛門（現今北濱五丁目帝國座の在る所、内北濱魚棚筋である。新主人平右衛門は、當時諸大名の金方を勤め、金廻りもよく、又懷德書院の門人であつたから此讀書癖ある丁稚を引取て世話したものらしい。これが家業に力を盡し、漸次出身し、遂に主家から暖簾分をして貰つて別家となり、主家から東二軒目南側に家を持ち、主家の姓山片氏を名乗り、升屋と稱するに至つたのである。是翁の本姓長谷川氏屋號糸屋であるのに、山片

氏升屋を稱した所以である。翁は當主平右衛門重賢、其子平右衛門重芳、二代に仕へて忠勤を抽んじ、晩年に至り、幕府から町奉行の手を経て、銀三枚賞賜せられたのである。此旌表の事は下に述べてある。

翁の主人が懷德書院の門人であつた上に、元來讀書好の翁は、幼時からまた此に入門し、中井竹山、履軒兄弟に師事し、大に業を積み、名聲を博して、同門の諸葛孔明と稱せられたのである。又傍ら豊後杵築藩士で、當時大阪で醫を業とし、兼ねて天文学の大家であつた麻田剛立に従つて勉學をした。翁の蘭學は固より、後日創唱の地動説の基礎は、茲に養成せられたのである。「續近世叢語」にも、

稚好學、受業中井竹山、旁從麻田剛立、受天學、又喜蘭學、以博學聞。竹山及履軒恒稱曰、蟠桃有識量、是以中井門、皆目曰孔明。

とある。「浪花人物誌」以下の諸書にも同様の文が見えて居る。翁の師事した中井兄弟、麻田剛立の事については、世人の夙に熟知する所であるから凡て省略する。

翁はまた書道に巧であつて、翁の筆蹟は實に見事なものである。筆勢にも翁の英邁の氣象が顯はれて居る。現に翁の大著「夢の代」刊本（後ニイフ）の卷首に挿んである書簡を見ても、之を知ることが出来るのである。「續近世叢語」に

蟠桃英邁有智局喜談經濟及身爲管轄益齋貸藩國有寵於諸侯。

と見え、浪花人物誌以下の諸書にも同意の文があるが、翁はまた非常なる經濟學者であつた。翁の大著夢の代や、大和辨後ニイフには、其持説が述べて有る。元來升屋は代々大阪に住し、金銀を以て仙臺其他東北諸大名の用達を勤めて居たのであるが、此家に番頭であつた翁は餘程力を盡したやうである。翁の生地神爪村の生家や、同地の故老の話にも、仙臺侯に非常なる信任を得、其定紋の衣服を賜はり着用して居つたといはれて居る。又翁の大著夢の代第二卷地理の部にも、翁が屢東北地方へ行つた事が見えて居るが、これは諸侯へ交渉の爲に越いたものゝやうである。殊に海保青陵の「經濟談」中に「升小談」と題して、翁即ち升屋小右衛門に關する一篇があるが、此に翁が大手腕を揮つて、仙臺侯を初め諸大名の財政整理を遂げた事蹟が記してある。又翁は白川樂翁公（松平定信）にも大に寵せられて居たやうである。これは續近世叢語以下諸書にも見えて居る。翁の出生地神爪村は姫路領であつたから、當時領主酒井雅樂頭からも用達を勤める様にと懇請があつて、國老高須隼人正が態々面會に來て依頼せられたれど、翁は到底其任にあらざる故を以て、遂に請に應じなかつた。其時國老は翁を上座に据ゑ、自分は下座したとの事である。これは翁の出生地故老の談話である。翁は文政二年

以前に凶年に對する貯藏米の方法を講じて、御褒美を頂いた事がある。然し其詳細は今日之を知ることが出來ぬのは残念である。この貯藏米法は翁の出生地にも起し、村民をして其恩澤に浴せしめたとの事である。それで翁の歿後、村民は其頌德記念碑を共同墓地に建て、今日尙儼存して居る。幸田氏の傳記に同村覺正寺に建立したと記してあるは違つて居るのである。

漢學に造詣深く、蘭學を修め、兼ねて天文學に精通し、且經濟學にも濫蓄淺からざりし翁の晩年は、續近世叢語にも、

當時坂人語市中人物必以蟠桃爲第一流云。

と見える如く、餘程の評判であつたやうである。浪花人物誌其他にも同様の事が見える。殊に海保青陵が「升小談」中に、

升小ガ升平ノ家ヲ興シタルハ、家法ヲ立タルガ始マリ也。今ハ升小ノ法ヲ諸家ニテ寫シ取リテ、鴻池、加島屋ヲ始トシテ、皆升小ヲ師トシテ法ヲ立ル事ナリ。

とあるのを見れば、また翁の大阪市中で重んぜられた一班が明かる。又續近世叢語に載せてある左の規箴は、亦翁の人物の如何が推知せられるのである。即ち

規箴 二十二章ノ中

山片蟠桃曰、先天下之憂而憂、後天下之樂而樂、是事君處事之節操、平生所以自任、學而不厭、誨人不倦、是脩己治人之要、終身所以自任、不逆詐、不億不信、抑亦先覺者、是賢乎、是接人之機密、心鏡所以自磨、右三言終身一日不可忘、拳拳服膺、可死而後已、焉故識以自警。

とある。

翁の記憶力非凡な事や、火災を恐れた事などの逸話が、幸田氏の「升屋小右衛門」に載つて居る。

小右衛門は、記憶力の強い人で、或年本家が火災に罹つた時、金銀出入の帳簿を失ひ、頗る當惑したるに、一々之を暗記し居りしたため、容易に新帳簿を作るを得たと傳へて居る、而して彼は一方ならず、火災を恐れた爲往來より幾尺かを退けて新建築を爲し、中二階より容易に上り得るやう通路を開き、中二階には少からず鹽鉢を備へ、事あれば直に是等の鹽鉢を出して屋根を蔽ひ、火粉の燃え附くを防ぎ、かくして二度まで類焼の災を免れたといふ。

とある。

翁は文化の頃から眼疾にかゝつて、同十年頃遂に失明した。誠に氣の毒の至りであ

る。翁の主家先代平右衛門が死んだ時、當主は僅に五歳であつたといふから、本家の維持に少からず心力を勞したのであらう。翁の眼疾は之に原因したかも知れぬ。翁の大著「夢の代」も盲目になつてからは、自ら口授して、其子芳達や門人に筆記させて、歿前半年に漸く脱稿したやうである。時に前後はあるが、丁度小説家の泰斗曲亭馬琴が、其一代の大著「里見八犬傳」の脱稿の有様と能く似て居る。苦心の程想ひ遣らるゝのである。

前にも述べた如く、翁は文政二年以前に凶年に對する貯藏米の方法を講じて旌表せられたが、茲にまた文政二年三月五日に幕府から町奉行の手を経て、其積年の功績を旌表せられた。即ち再度の賞賜に與つた。實に名譽の事であつた。これは翁の歿する二年前である。翁のこの後間も無く、久し振に故郷神爪村へ不自由な盲目の身を以て歸り、三四ヶ月間も滞在し、其の間に親戚舊友、知己は勿論、村中の老幼を集めて、種々有益な講話をしたのである。翁の此歸省は所謂錦衣故郷へ歸つたのであるが、已に失明後である。誠に遺憾の極であつたであらう。當時翁の心中は感慨無量であつたと想はれる。翁のこの折歸省記念として、村中約八十戸一般に、三重一組の朱塗木杯に、小判一枚宛を添へて之を贈與し、菩提寺同村眞宗西本願寺派平等山覺正寺へは、此木杯の外に特に多くの金品を添へて寄進した。村中に配つた木杯は最早今日遺つて居ない様

であるが、菩提寺へ贈つた分は、今尙傳へて同寺に所藏せられ、爾後毎年新春の祝酒を酌む時に限つて使用せられて居る。蓋し成功記念物であるから、延喜を祝ふ意であらう。此菩提寺に遺つて居る三重の木杯は、何れも朱塗端金である。大は直径三寸七分、内面に金粉で下の文句がある。

予古へ凶年のため聊貯米をせし折しも、從御上御褒美を下しおかれしことあり、誠に蚤の息の天ともいふべき有がたさいふ限なしは、たたび存もよらず、從江戸表斯る御旌表を下しおかるゝこと猶更有がたき御事にあらずや、よて予の古郷神爪てふ村里の親族友どもなどへ盃に摸して贈侍ぬ願くは、永く傳へて善を勧め惡を懲し良民となりて御奉公をせしにする一助ともなれかしといふ時は、文政二といふとしなにはにすめる山片よしひでしるす。

と、記念として之を呈する旨を述べ、中は直径三寸三分で、内面に金銀粉で家の定紋三ツ柏のくづし(柏葉三枚小枝に附けるもの)を畫いてある。小は直径二寸八分五厘で、表面と裏面とに金粉で、下の幕府の賞賜申渡書が記してある。

其方義主家二代大切に相勤盲人に相成候後も、不相替出精相勤候段忠勤之次第奇特成義に付褒置銀三枚被下之

右文政二己卯のとし彌生五日(以上裏面)

梶木町

升屋小三郎同居

小右衛門(以上裏面)

この三重木杯は、翁の晩年を語る一資料である。

翁はこの文政二年歸省から大阪へ立歸つて、後程なく病に犯され、翌三年春以來は、餘程重くなつた。これは、夢の代[の]跋に見えて居る。遂に藥石も其効を奏せず、四年の春此世を去つたのである。遺骸を天満の善通寺に葬つたが、墓石にはたゞ長谷川氏墓とのみある。歿年は「續近世叢語」に文政四年「二四八一」歿年七十四と見え、又神爪村共同墓地の頌徳記念碑にも文政四己二月二十八日往生とあるので知れる。これから逆算すると、翁の生年は寛延元年「二四〇八」である。幸田氏の「傳記」には、延享三年「二四〇六」と見え、土屋氏の「新學の先驅」(單行本)に、安政四年「二五一七」歿七十一歳とあるのは、共に誤である。翁の出生地神爪村共同墓地の記念墓碑は東向に建てゝある。蓋しこれは大阪に向つて建てたのであらう。表には釋宗文墓、右側に文政四己二月二十八日往生、左側に長谷川安兵衛弟俗名山片小右衛門裏には施主當村中謹建之と刻んである。これで戒

名や其他の事がわかる。幸田氏の「傳記」には、記念碑の刻文の位置の記載が少し違つて居るのである。

翁の家系については、翁の生家長谷川氏及同家の菩提寺覺正寺過去帳を調べたが、其祖先の事は少しも明からぬ。只知り得るのは、翁の時代以後の生家の事に止まるのである。翁に關しては勿論其子孫については何等の記載がない。これは多分翁が大阪で歿したからであらうと思ふ。翁の子孫については、只「夢の代」の巻終に男、山片芳達とあるのと、僅に「續近世叢語」に、

子芳達、襲稱小右衛門、好學幹蠱、有父之風。

と見える丈である。覺正寺所藏の木杯の文句に、梶木町升屋小三郎同居小右衛門とあるのを見ると、また小三郎といふ子があつたやうであるが、これは後に父の名を襲稱した芳達の幼名であらう。幸田氏の傳記には、「小右衛門の玄孫三藏氏は、五年前（明治四十三年より）東京にて歿せられ、小右衛門の家を相續して居られた小三郎氏も、七八年前歿せられたといへば、先づ長谷川家の血統は、全滅したものといつてもよからうと見えるから、翁の血統は絶えたやうである。

翁の妻は、加古郡別府福岡氏の女であつた。當主福岡卯市氏の家である。名は何とい

つたか詳かでない。只近年まで翁の命日には、必ず此家の人が、神爪村の記念墓碑へ參詣せられ居たとの事である。

翁の主家は、代々山片平右衛門と稱し、連綿として今日迄續いて居る。當主平右衛門氏は、矢張大阪に住し、嘉納合名會社々員である。家に翁の著述「夢の代」や、筆蹟や、所用の藏印等を所藏せられて居る。其一部は刊本「夢の代」の巻首に挿んである。

今下に自分が翁の生家菩提寺覺正寺其他から調査した所に依て、翁の生家や翁の家の系統を示さう。先づ覺正寺の過去帳から、翁の生家の分と思はれるものを抄録すると、

尼 妙耀

安永六丁酉正月七日
當所安兵衛妻六十一

釋 普照

天明七年五月二十二日
當所安兵衛父小兵衛

釋 正芳

文化七年五月十五日
安兵衛母武助

釋 普宗

文政四年十二月二十四日
定四郎祖父

釋 智明尼

天保五年五月十日
定四郎祖母

智 秀

天保六年十二月二十二日
定四郎妻

釋 惠淨

嘉永四年四月二十一日
定四郎

欄外ニ「大阪ニテ死、堂島稻念寺ニ願シ引導」トアリ

コレハ定四郎ノ兄弟ナランカ

此兩人定四郎祖父トアルハ或ハ定四郎ハ前記安兵衛ノ實子死セシ故他ヨリ入籍セシモノカ或ハ其父母ノ事ニテ便俗「オジサン」オバサン」ノ意カ然ラバ定四郎ハ後妻ノ出ナリ

欄外ニ「一名武助ノ稱アリ糸屋安兵衛跡」トアリ

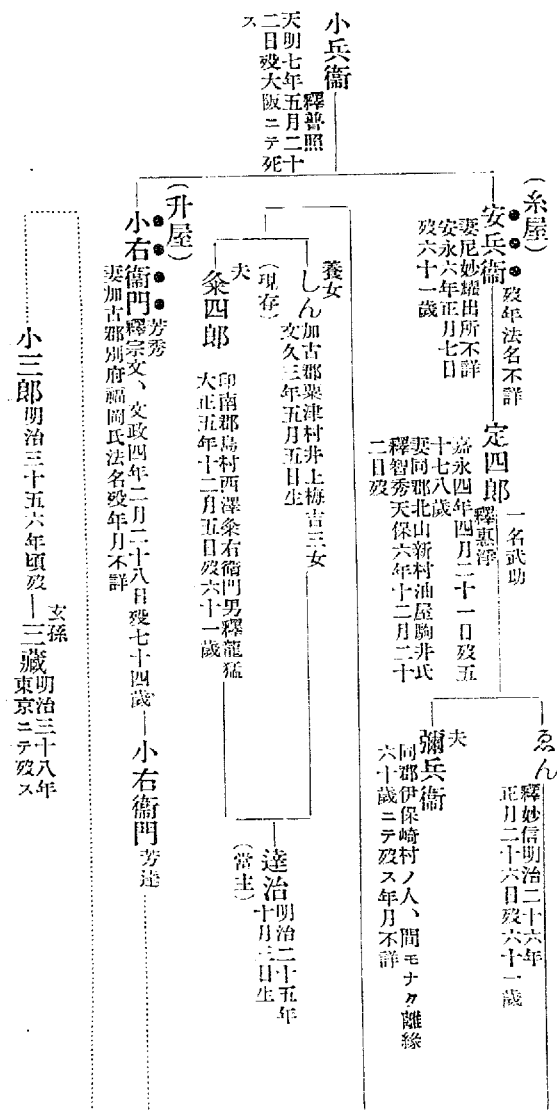
釋尼妙信

明治二十六年一月二十六日
村長谷川シン義母欄外ニ「實ハ糸屋定四郎銀幼年ヨリ不具ナル故若年ヨリ尼トナリ下附ノ
法名ヲ與ヘシナリ」トアリ

釋龍猛

大正五年十二月五日
長谷川糸四郎

である。以上は主なる人々丈を掲げたのである。これと長谷川氏で聞いた所、幸田氏の
「傳記」所載の分とに依て、翁の系統を示さう。



此系統でも知れる如く、翁の生家は、當主達治氏の兩親が、共に他家から入籍して家を
繼いだのだから、血統は絶えて居るのである。又翁の子孫も、上記幸田氏の「傳記」にある
如く、絶えて居るやうである。要するに長谷川家の血統は、共に全滅したやうである。こ
れは特に注意して置くのである。又前掲の系統で、自分は覺正寺の過去帳に依て、翁や
兄安兵衛の父を小兵衛としたのであるが、これは單に自分の推定に過ぎぬ。過去帳に
は屋號も苗字も無い。只、當所安兵衛父小兵衛とある丈である。當時神爪村に、安兵衛と
いつた人が他にもあつたかも知れぬ。然し自分の推定は或は當を得て居るかも知れ
ぬが、確に斷定は出来ないものである。それで自分は、前に翁の祖先の事は、明からぬとい
つて置いた所以である。母の事は無論不明である。

翁の知友について、少しく述べねばならぬ。翁は中井竹山、履軒兄弟に師事し、而も同
門の孔明と稱せられた位であるから、當時懷德書院に關係ある人々とは、親交があつ
たのは勿論である。又其職業上から、當時大阪市中の富豪や商人なども、交際が極め
て多かつたのは、いふまでもない事である。然し自分が茲に翁の知友として、特にいは
ねばならぬのは、其蘭學や天文学の方面の者である。翁は麻田剛立の門下であるから、
同門中で、寛政改曆に功績を顯はした第一世高橋作左衛門(東圃)や、又この改曆に亦共

に功を立て、尙大阪長堀富田屋橋畔に、自ら私設の天文臺を建て、觀測に従事した間、大業十一屋五郎兵衛と親交があつたことは無論である。又この間大業が同志小石元俊と謀つて、江戸大槻玄澤の門に送つて、蘭文を學習せしめた。傘工橋本宗吉とも、厚誼を結んだやうである。殊に翁の大業の天文學は、此宗吉の助を借つて大成したものであると迄いはれて居る位である。以上諸學者の傳記は、已に洋學史、文明史、將た開國史に關する典籍にも見えて居るから、茲に改めて詳述する要もなからう。凡て省くことゝした。尙この外に多くの知友があつたであらうが、今之を審にすることが出來ない。只自分は茲に主なる當時の洋學者について、其交友の一斑を示すに止まるのである。翁の門人も澤山あつたであらうが、只自分には「夢の代」を筆記した山本義道、近藤秀實の二人丈知り得るに過ぎぬ。而も此二人の傳記は少しも明からないのである。

山片蟠桃翁の事蹟

龜田次郎

二 (つぎ)

翁の著述は「加古郡誌」に「著書數種あり」と見えて居るが、自分は「大和辨」と「夢の代」との二書より外に知らぬ。「大和辨」は文化年間(二四六四—二四七七)に、米價及一般の物價を論じたもので、當時竊に幕府へ献策したものである。今現に某大家に所藏せられて居るが、秘して吾々の閱覽を許されないのは、誠に遺憾な事である。本書は無論寫本であつて刊行本でない。冊數は未詳である。「夢の代」は翁畢世の大著である。本書については、

已に「續近世叢語」にも、

家業有微暇則博讀群籍研味理義嘗夏日絕晝寢撰夢代十餘卷自天文地理食貨經濟以至神代及鬼神等說犁然明辨無遺矣竹山兄弟稱其有見解桑名老侯樂翁公素嘉蟠桃爲人及讀夢代益以奇之。

とある。又本書の成立の由來や其脱稿等については、翁自身の序跋で明かに知る事が出来る。今下に其文を抄出せう。先づ序文には、

自叙

夏の日の長きに倦みて、枕を友とし眠らむとせしが、忽ち思ふに、我すでに齡五十に過て、徒に稻を喰ひ布帛を衣て、枕にのみなづむは、口惜しきことにあらずや。然りと雖世教に及び人を治むる事は、我輩如きの任にあらず、せめては我竹山履軒二先生に聞たる事を書つらねおきて、子孫の教戒ともせば、此上の本望ならむかと、硯にむかひて書そめしより、日々に眠萌さんとすれば、忽ちおしまづきによりて、筆をとり書付るのみ、其中には國家の事に及びし事もあるべきなれども、答むべからず、唯これ一家の事のみ、他人の見る書にあらず、此卷の始は眠りを止めて書しまゝに、宰子の僕と題せしに、履軒先生難じて、夢の代とあらため題すといふのみ、享和二年歲星

戌にやどる夏六月吉日、隱市の散人は是をしるす。

と見えてあつて、其の起稿の由來や書名改題の事が明かる。跋文には首に、予嚮に夢の代を述て小兒輩にあたふ、夫より二十年の間打捨置しが、内十年餘は塵事打つゝいて空しく止め、殊に文化の比より眼病にかゝりて、遂に明を失ふことこゝに八年ゆるに、無事終に果さず、然るに去年來病におかされ、春來は命も絶なんとす、然るに此書の旨やむにちかし、誰にか託して世に行はん、ゆるに病をおかして附録を作る。

と記し、終に、

歌に死したる跡にて

芳秀記

地獄なし極樂もなし我もなし

たゞ有物は人と萬物

又

神佛化物もなし世の中に

奇妙不思議の事はなをなし

文政三中秋

播陽山片芳秀輯

男山片芳達

山本義道稿

近藤秀實

と辭世やら筆記者の名を書付けて居る。この跋文で、本書の成功の時代も知れるのである。上記の序跋の文に依つて、本書は享和二年(二四六二)盛夏の候翁五十五歳の時に起稿し、半頃中絶すること十餘年、文政三年(二四八〇)八月十五日を以て脱稿した事が明かる。時に翁は七十三歳で、其死に先づ僅に半年である。晩年盲目となつてから、子芳達や門人等に口授して筆記せしめて、漸く稿を終へたのである。其苦心したる大著たることは想ひ遣られるのである。

本書の正本は、今何處にあるか明からぬ。當主山片平右衛門氏(翁の主家)の談話にも、「此稿本が著者の血族に傳はつて居るとは耳にせず、又最正確と思はれるものは、子芳達の淨書したのに、翁が盲目の身で手さぐりに序文を認めたのがあるがこれであらう。然し此書も、著者の玄孫三藏が先年東京で歿したので、今何處にあるか詳かでない」との事である。誠に遺憾の次第である。翁は生前他人に本書の謄寫を命じ、副本十數部

を作り、友人の間に贈呈したそうである。これが今世に流布して居る寫本である。今自分の知つて居る所藏者は内閣文庫に數部、京都帝國大學附屬圖書館、瀧本誠一氏（日本經濟叢書の編者）、山片平右衛門氏（著者の主家山片平右衛門氏の後裔）に各一部所藏せられ居るの丈である。これ以外のは知らぬ。瀧本氏は、上記副本の一であるとの事である。これが近年刊行せられた『夢の代』の底本である。この刊本の事は下に述べる。山片氏は正確なものである。これは正本の寫で、著者の血族匹田氏の所藏であつたが、先年同家亡滅の際、山片氏の父が收めたもので、序文の字體の振ひ居るのは、盲人の筆蹟を其儘に謄寫したからであるとの事である。

本書は、寫本の儘、長く世に流布して居つて、近年まで全部刊行せられなかつた。只本書第十卷「無鬼論の上」の部丈が故内藤耻叟氏に依つて「無鬼論辨」と題し、同氏校（少年日本文庫）第十二編（明治二十五年博文館刊）に收めて出版せられたに止まる。内藤翁は其解題の中に「無鬼論」の事を辨する頗直截痛快なりといつて賞讃せられてある。本書の全部刊行は、大正五年六月二十七日發行の『日本經濟叢書第二十五卷』に收容せられたにある。東京の日本經濟叢書刊行會の發行である。洋裝布表裝四六判で、表題目次六頁、解題每頁十三行三十四字、詰十頁、著者の眞蹟所用の印譜一頁、本文每頁十五行四十五

字、詰六百四十四頁、奥付一頁、合計全部六百六十二頁の大冊である。此刊本は編者瀧本誠一氏が其所藏本で、著者が友人の間に贈呈した副本十數部の一と稱するものを底本とし、これを内閣文庫本數部並に山片平右衛門氏（著者の主家の後裔所藏本）に對照して、訛誤を訂正して刊行したものである。誠に立派に出來上つて居る。此に依て翁の大著が廣く世に行はれ、學界に大なる裨益を與ふる様になつたのを、自分は非常に喜ぶものである。

今下に本書内容について概説せう。本書については、已に瀧本氏が、上記刊本の解題の發端に、

本書は天文地理神代・歷代制度經濟・經論雜書異端・無鬼及雜論の十一項に就て、著者の師事せる中井竹山及履軒兩人に聞き得たる事柄を、筆に任せて書集めたるものにして、其の次第は著者がその序文に告白する所の如し、然れども著者は後段に記するが如く、非常の卓見家にして、固より毅然たる獨創の識力を有し、殊に經濟上の問題に至りては、中井兄弟の如く徒らに机上の空談を事とするものにあらず、自ら其の事に當りて實歷經驗したる所なれば、其の記述論評する所、頗る肯綮に當り、之を竹山の草茅危言履軒の雜著等に比較すれば、却て大に見るべきものなきにあらず。

す、然れども本書十二卷中専ら經濟上の問題に涉るもの、第五(制度)及第六(經濟)の兩卷に過ぎずして、聊隔靴搔痒の憾なきにあらざるも、要する所本書全部を通讀玩味すれば、著者の社會經濟觀の尋常凡庸にあらざりしことを知るべきなり、但本書は全篇を十一項に分類しあるも、其の區別甚だ明瞭ならず、例へば上記制度の篇(第五卷)と經濟の篇(第六卷)とは條目に於て截然と分類しあるも、其の内容は殆んど彼此混同して、二者の區別を見ること能はざるの趣あるも、凡そ斯くの如きは徳川時代の著者に於て、殆んど皆免かれ難き通弊なれば、之を本書にのみ咎むべからざるは論なきなり。

と記されてあるので、其要を盡して居る。本書全篇十二卷で、上記十一項を各一卷宛に記してあるが、其中無鬼の篇が上下に分れ第十第十一兩卷となつて居る。合計十二卷となつて居るのである。各卷に記述の事柄の要旨は、本書凡例に述べて居るので明かるが、今其要領をいへば、先づ天文地理の部に於ては、當時制禁の地動説を主張して居る、これが翁の所説中最特筆すべき事柄である。この事につきては下に述べる。神代の部では、古往傳來の説を打破して皇祖の事を議し、歷代の部では、國史の誤謬を刺り家康の事に及び、制度經濟の部では、當時の政治を難じて財政經濟を論じ、經論の部では、

無鬼論を發して朱子を難し、又鬼神を論じては、儒佛兩教の古來の傳説を排撃して居る。誠に痛快適切の議論が全篇に溢れて居る。翁の非常なる卓見家たることは、吾々の感服に堪へない所である。殊に翁が凡例の中に於て、

一制度經濟ハ、コレ亦其位ニアラズシテ其政ヲ議スルモノナレバ、恐ルベキモノカ、然レドモ徂徠太宰二先生ノ經濟錄政談獨語ノ類アレドモ、世ニ行ハル、ヲ見レバ、公ノ御心ハカクノゴトクソレ狭小ナラザルモノカ、寛仁ノ至リニ浴シテツヒニ大言ヲ吐クモノハ、上ヲ恐レザルノ甚シキナリト雖、幸ニシテ我罪ヲ免レシメヨ。(下略)一經書ヲ議論シ古人ヲ褒貶スルコトハ、尙サラニ管見井蛙ノ小ナレバユルサルベキカ、異論ヲ排スルハ賢聖ノ遺教ニシテ苟モ書ヲ讀モノ、辭セザル處、無鬼ノコトニ到リテハ後人ノ議論ヲ恐ル、唯コレ聖賢鬼神ヲ敬シテ教ヲ立ルノ義ニ背クナラント雖、聖人ノ教ハ直道ヲ本トス、シカルニ神アラバ有ト云ベシ、無クバナシト云ベシ、何ゾナキモノヲ有トシテ人ヲ迷サンヤ、是ヲ以風俗ヲ教道セントセバ、コレ佛家ノ方便トナンゾ選マン、所謂五十歩ヲ以テ百歩ヲ笑フモノナリ、故ニ今佛ヲ排シ鬼ヲ退ク、三代ノ直道ヲ以テ之ヲ辨ズ、スベテ鬼神ノ説ニ溺レテ往テ還ラザルモノヲ教ユルモノナリ、必ズシモツヨク無鬼ノ論ヲ云立ツルヲアヤシムコトナカレ。

一古ヨリ唯一通りノ道ヲ論ズルトキハ、其語ユルヤカニシテ順正ナリ、不義ヲ排シ不道ヲ戒ムルハ、其論キビシクシテ主角アリ、孟子ト雖主角ナキコトアタハズ、如何トナレバ、此時楊墨道ニフサガル、コレヲ開カントスレバ、其病ニアタル攻撃ノ劑ヲ施サズンバアルベカラズ、是ヲ以テスラ尙治セザルナリ、何ゾ溫順ノ語ヲ以テ其不義ニアタラン、孟子スデニシカリ、況ヤ後世紛擾タルヲヤ、ユズニ其論ニイタリテ主角多キヲ免レズ、必シモ太宰風ナリト非トスルコトナカレ。

一コノ書古ヨリアリフレタル議論ハ、ソレノニユヅリテ舉ルコトナシ、只其新説發明ノコトヲ舉ゲ、又世間ノ謬リ來リタルヲ改正スルモノナレバ、ミナソノ古ク傳ヘタルヲ用ヒザルナリ、コレマダ奇ヲ好ムニアラザルナリ、スベテ中井兩夫子ニ聞コトアルニ與ルモノ、ミ、余ガ發明ニモアラザルナリ、シカレドモ太陽明界ノ説、及ビ無鬼ノ論ニ至リテハ、余ガ發明ナキニシモアラズ、其説ハスベテ杜撰妄證多シト知ルベシ。

一鬼神ノ論ニオイテハ（中略）本コレ鬼神ノ性情ナキコトヲ示シ、後儒ノ過ヲ正シテ、儒家ノ鬼神ニナヅムモノヲ敎戒シ、次ニ我朝古ヘヨリ祭り來リ誤リ來リテソノ實ヲ失ヒ、佛徒ニ妄弄セラレテ本地垂跡ノ説ヲ云ヒ、神體ヲトリ失ハレテモ、神託靈驗

冥罰ノナキコトヲ書ツラテ、愚民兒女媼婆ノ鬼神ニアヤマラル、モノヲ禁諭ス、終ニハ狐狸其餘妖怪ヲ誤リ來リテ、心神ヲ惱マス者ヲ敎示スル者ナリ、スベテ正道ノ外ハ、鬼神怪異ノ變ニオイテハナキモノト知ベシト云コトヲ辨ズ。

一此書佛法ヲ排スルコト讎敵ノ如シ、何ゾ佛家ニ怨恨アラシヤ、只カクノ如クナラザレバ異端ノ害ヒラカレザルナリ。（下略）

といつて居るのを見ると、翁の萬腔の不平が發して本書を成したものであることが知れる。また同時に翁の非凡の人物であつた事が明かるのである。又本書には引用書目の名を卷首に列舉して居る。天經或問以下二百六十有餘部ある。和漢の有名な典籍は殆んど網羅して居る様である。この引用書目を見ても、翁の博學達識であつた事が推知せられるのである。上記瀧本氏の解題では其刊行の叢書の性質上から、經濟方面を述べられて居たのは尤な事であるが、實に此方面に止まらず、全部各卷凡て各方面に涉つて卓見は多いのである。瀧本氏の説の如く、經濟篇に於ても勿論卓見は多い。就中財政や米價や積蓄法などを論じて居る點は、誠に爲政家の注意すべきものがある。最近我朝野の間に喧しい問題となつて居る米價調節令の是非論や、一投機者の戒告事件の當否説を論議して居る人士には、確に一顧の値がある論があると思ふ。今

自分が本書に就いて茲に特筆大書して置かねばならぬ點は、第一卷の天文篇である。本篇は、實に著者の毅然たる識見を窺ふに足るのである。翁は凡例の發端に本書の性質并に天文の篇について、其所信を述べて居る。今其文を下に抄出する。

一此書ノ作ヤ他人ニ示スニアラズ、故ニ其言辭修飾スルコトナク、唯其心ニ浮ムマ、ニ書ツラチタレバ、固ヨリ鄙陋ナルハ其所ナリ、又子弟兒女子マデニモヨマシメントス、故ニ尙サラ野鄙ヲバイトハズ、心ノ及ビ假名俗語ヲ以テス、經書ヲ引トキハ、止コトヲ得ズシテ漢書ヲ用ユ、故ニ他人コレヲ見給フトモ、其鄙俚ヲ笑フ事ナカレ。一天文地理ノ部ニ於テハ、初メニハ謹シミテ古法ヲ述ブト雖、ソヒニハ當時制禁ノ地動ノ說ヲ主張シ、又ツヒニ存分ノ臆說ヲ發シ、視ル人ヲシテ迷謬セシム、コレ我ノ罪ナリト雖モ、コレモ亦心ノ浮ムマニ、書及ボシタルナリ、アヤシムコトナカレ。當時制禁の地動の説を主張するの一句は、實に翁の抱負自信の如何を想見することが出来、此夢の代第一卷天文篇の内容は、今日より見れば勿論言ふに足らない極めて幼稚なものであるが、當時未だ何人も夢にも知らない世に於て、泰西流の星學を發表したことは、誠に驚嘆すべきものである。本篇に於ては、東西曆法の得失を考へ、立春を以て元旦とする新曆を自作して、之を當時の曆に對比し、潮汐満干の理を述べ、恒星

太陽説を紹介し、彗星について説述し、地動説を唱道し、引力を説き、篇中説明に挿圖を以て解明して居る。自分は誠に當時出色のものであつたと信するのである。翁の天文學では、特に其地動説の唱道を偉とするのである。而も此唱道が、本邦に於ける該説の創唱であることは、永く吾々の記憶すべきものである。地動説は、今日小學の兒童でも、尙能く之を知つて居る事で、何等異とするに足らないが、前にもいつたやうに、翁が徳川の世、制禁の時に毅然する異説を公にして、毫も恐れなかつた事は、實に我學界の誇とすべきのみならず、其人物の非凡を證するに足るのである。今次に翁の唱へた地動説を簡略に述べやう。翁は印度支那日本の天文學説の無稽なるを論じ、泰西諸邦の學説の正確なるを説きて、

西洋歐羅巴ノ國々ニオイテハ、ソノ實地ヲ踏ザレバ、圖セズ云ハズ、天文ノ如キハ海外諸國ニ往來シ、測量試識シテコレヲ云ユエニ、大舶ヲ艤シテ萬國ニ抵リ、天文地理ヲ正スコトナリ、ユエニ梵漢我國ノ如キ虛妄ノ說ハナシ、コ、ヲ以テ其說ヲ信スベシ、又其學ニクハシキコトハ、極メ盡サレバ措ザルナリ、二百年バカリ以前、地谷多録梅ナド豪雄出デ、ツヒニ地動儀ノ說ヲ發明ス、ソノ術日輪中央ニ位シテ永靜不動、五星及地ヨリ恒星諸天、ミナ日ヲ心トシテ西ニ旋ル、ソノ月ナルモノハ地ヲ心トシ

テ旋ル、木星土星ノ如キモミナ月四五アリテ各其本星ヲ心トス、此說出テイヨ／＼マス／＼天文精微トナル、前説ノ如キハ小兒ノ戯ニモ及バザルナリ、西洋人ニ見セタランニハ、三歳ノ小兒ト雖腹ヲカ、ヘテ笑フベシ。

といつて居る。又更に、

歐羅巴ノ天學ニ精シキコト、古今萬國ニ類ナシ、殊ニ萬國ヲ廻視シテ、ミナ實見ヲ以テ發明スルコトニシテ、誰カコレニ敵セン、ソノ上「ホウレン國」ニ「ヘイコツホイリン」ト云人、地動儀ノ説ヲ盛ニス、今ニ至リテスデニ三百年ニナル、其發明ノ書ヲ翻譯シテ崇禎曆書ト云又弟子「コーベルニキユス」是ヲ増補ス、其書ヲ譯シテ曆象考成後篇ト云、シカルニ太陽ハ動カズ、地球周天スト云コトハ誰カ是ヲ肯ン、難ジテ曰、コノ地球飛旋ルモノナラバ、山川草木家屋ミナ崩レ倒ルベシ、ナンゾ海水モコノマ、ニアラント、コレ尤ノコトナリ、歐羅巴ニテサヘモ初ハ合點セザリシニ、ツヒニ其術理ニ落着シタルヨシナレバ、急ニハ中々合點ナルマジ、今ソノ法ヲ以テ算ヲ起シテ密合スレバ、ナンゾ是ヲ疑ハン、皆彼我ノ差ニシテ、我ハ不動ニシテ他曜ハ旋ルト云トキハ、ソノ星ニナリテミレバ同ジコトナリ、太陽ハ天地ノ主ナリ、地ハ主ニアラズ、太陽動カズシテ、他曜ノ動クハ其處ナルベシ、今ニモ歐羅巴ノ人ハ大船ニノリテ地球

ヲ巡リ、ソノシラザル所ヲ發明スルコト、萬國ノ及ブ所ニアラズ、ザレバ天地ノコトハコレニ任ジテ、其糟粕ヲナムルノ外ハアルベカラズ、必シモ西洋ノ術ヲ疑フコトナカレ、アツク信ジテ從フベキモノナリ、ユエニ梵漢倭ノ井蛙ノ愚術ヲ出シテ、總ルニ西洋ノ地動ノ術ヲ示シテコレヲ證シ、愚蒙ノ人ヲサトスノミ、(以上天文篇三十五ノ中)と論じて、地動説の正確であることをいつて居る。次に彗星考を説き、明暗兩界説を述べ、尙圖解を以て地動説を説明し、更に諸惑星の回轉を説いて、終に於て

シカレバ是レ火星ノ地球ニオケルハ、地球ノ金星ニオケルガゴトク、金星ノ地球ニオケルハ、地球ノ火星ニオケルガゴトクナルモノナリ、然バ木星ノ火星ニオケルモ水星ノ金星ニオケルモ、其コトマタ推テシルベシ(コノ圖ニ註アレド略ス)西洋ノ新法ハ五星皆回轉スルヲ以テ、天ノ左旋ハ地ノ回轉ニ生ズトシ、恒星ミナ不動ニシテ火體ナルコト太陽ニ同ジトス、歳差ハ地輪ノ變動ニ生ジ、地輪ノ變動ハ地輪ノ南北ニ偏ナルニ生ズトシ、地球ノ偏ナルハ又回轉ノ勢ヨリ生ズトス、コレヲノ測術ソノ精密ヲシルベシ、梵漢倭ノ及ブ處ニアラズ、(天文篇三十七ノ中)

と斷じ、更に地動説や、諸惑星觀測の基礎は、引力、重力に依るとなし。

西人ノ地動ヲ言ノ基キ又諸天五星ヲ視察シ、測量スル處ノ基ハ引力重力ニアリ、引

力ハ其一星へ引トルノ氣ヲ云ナリ、重力ハ源ヲ造化不測ノ中ニウケテ、用ヲ世間萬事ノ表ニ施ス、天ハ是ヲ得テ清ク、地ハコレヲ得テ、ホトリ澤ク、水火是ヲ得テ昇降シ、山澤コレヲ得テ氣通ジ、人類萬物是ヲ得テ安泰ナリ、ゴノ間ニ註アレド略ス凡上下位ヲ分チ、高卑ノ品ヲ分ツモノ、ミナ此力ニヨラズト云モノナシ。(天文篇三 十ノ中)

と述べ、尙詳しく説明して居る。翁は最後に、

目ニ見ル所ノ恒星ハ、ミナ太陽ニシテ繞ルコトナシ、恒星ノ内ニ引カレドモ、大星ニ近キ星ハ、大星ニ引カレテメグルナリ
唯我地球ノメグルニヨリテ、他ノ陽星ヲ繞ルト思フナリ、(天文篇三 十四ノ中)

といつて居るのである。以上は翁の地動説の極概略である。翁の創唱した此説は、決して其獨創ではない。蘭學から受けたものであるのは無論であるが、翁が當時何人も未だ言はない所を唱出した點は、大に賞讃せねばならぬ。今自分は下に地動説の起源を述べ、延いて翁の所説の來由をも併せていはうと思ふ。

泰西の天文學は上古埃及に於て發達し、次て希臘に入つてから一段の進歩を遂げ、地球の圓形、月の日光反射説などは、紀元前六百年、希臘のタールレス既に之を唱へて居る。後ピタゴラスや、アリストートルは太陽系を論じて居る。然るに、羅馬帝パトリシアン及びアントニオの世になつて、プトレミイの地靜説出で、果ては地球圓形説さへ影

を沒するに至つたのである。後世に及び、漸く西曆千四百七十三年コペルニクス波蘭に出で、地動説を復活し、其後丁抹のチコーブラッへ、伊太利のガリレオ二氏を初め、千六七百年代に英吉利のニュートンに至つて、地動説は確固不拔の定説となつたのである。此ニュートンの後に、英吉利にはゲル出で、千七百四十年「曆象新書」を著し、其説を祖述したのである。此等泰西星學の發達史については、翁も此「夢の代」天文篇第二十八節に述べて居るのである。

翻て我日本に於て地動説の唱道は如何といふに、未だ嘗て之を唱へた者は無く、翁が之を創唱する迄、誰も公言する者が無かつたのである。即ちニュートン時代より百年以後迄も、尙地動説を惡んで居た様である。これ一は、當時制禁の世の中で、異説や新奇説を唱へ出でたならば直に嚴罰に處せられ、或は身首處を異にするやうな事になるかも知れなかつたのにも依るであらうが、また一は、當時尙我學界の幼稚未開であつたからである。誠に耻しい次第である。本邦に於ける最初の泰西天文學は、支那明末から清初へかけて生存して居た彼土福建建寧の人游藝「字子六」の著「天經或問」を専ら祖述したものである。翁も「夢の代」引用書目の最初に、此書を掲げて居るのが、又天文篇の所々に此書を引用して居るのである。抑支那へ泰西天文學の入つたのは、耶蘇教

宣教師の力で、西暦千五百八十三年(明萬曆十一年、日本天正十一年)伊太利人利瑪竇(Recio, Matteo.)の北京に來たのを始とする。此人は千六百十年(明萬曆三十八年、日本慶長十五年)五月十一日彼地で死んだのである。年五十八である。『天經或問』に、支那へ來た西洋天學家を此利瑪竇以下龐迪我(Pantoja, Diego de.)まで十人の名を掲げて居る。此龐迪我は、西班牙人で、千五百九十九年(明萬曆二十七年、日本慶長四年)に支那へ來て、千六百十八年(明萬曆四十八年、清太祖天命三年、日本元和四年)一月澳門で死んで居る。年四十七である。それで游子六の『天經或問』は其後の著述であることは確である。恐らく支那に於ける最新の天學書であつたであらうと思はれる。我日本に於ては、西川如見の子正休が、父の歿後江戸へ來て此書を講述して居たのを、幕府の侍醫長尾分哲が懇請して、之に句讀を施し、享保十五年(二三九〇)に出版したのである。先是歐洲に於ては、地動説は既に學界の定説となつて居たが、舊教の傳道師のみは、矢張古説を墨守して居たやうである。それで舊教徒の著述たる『天經或問』も、亦「天動地靜説」で、

天體如碧瓊透映而渾圓七曜列宿層々運旋以裏地地如彈丸適天之最中永靜不動而四面人居焉。

と記してある。本邦では、伊太利人シローテの大輦に上陸したのを江戸に拘囚し、新井

白石をして其言を録せしめて作つたといふ、本邦に於ける泰西流地理書の嚆矢たる『采覽異言』にも、

西人輿地之説曰天形渾圓地居其中海水相附共爲圓體猶鷄子中黃孤居青內唯天包于外旋轉不息地凝于內確定不動而上下四旁皆有人居焉。

とある。シローテも舊教宣教師であるから、地動説をいはなかつたやうである。然るに後に至つて、三浦梅園は、多年觀測實究の結果、日靜地動の疑を抱いたから、之を其推重せる麻田剛立に質したが、其時には剛立も未だ明答を與へる程の學力も無く、且支那の天文學者は、前にも述べた如く地靜説ばかりであつたから、已を得ず梅園は其三十一歳の時起草し、二十三年間に二十三回改稿して成つたといふ著『玄語』(安永四年脱稿)にも、

天は虛にして動き、地は實して止る。

と記して居る。然るに梅園は後五十四歳の時、長崎に於て松村安之丞(翠崖)から地動説を聞いて、其著『歸山錄』に於て、僅に、

西洋百年來の説は、日動くに非ず、地止まるに非ず、日よく止り、日の外なる者皆動いて日を周る。

といつて居るのである。梅園は斯く地動説に意を留めたに拘らず、未だ斷乎として其所信を確立するに至らなかつたのは實に惜しむべき事である。然るに梅園、剛立二人と時を同じうした山片蟠桃は前にも述べし如く享和二年夏起稿し、文政三年八月十五日脱稿した其大著『夢の代』第一卷天文篇に於て、遂に地動説を確立し、本邦に於ける該説を創唱するに至つたのである。蟠桃は蘭學や天文學を麻田剛立に學んだ事は、前に述べた通りである。此師剛立は三浦梅園の師綾部綱齋の二男である。共に豊後の出生である。尤も梅園は郷里に在り、剛立は國を去つて大阪に住して居たのであるが、共に天文學に思を潜めて研究して居たのである。且兩人は互に親交の有つたのは言ふ迄もない事である。蟠桃翁の天文學は、直接其師剛立から受けたと同時に、間接に、其師剛立の友人梅園からも影響を受けたであらうと思ふ。それで自分は、蟠桃翁の天文學は、他の感化や影響も有らうが、主に剛立、梅園二人に基く所があると考へる。又縦松村翠崖や三浦梅園が、蟠桃翁以前に地動説を思付いたとはいへ、此二人は未だ斷乎として之を發表するに至らなかつたのである。時代に於ては、此二人は少しく早いによ、其地動説創唱の功績は、蟠桃翁に歸せねばならぬと自分は信するのである。或は翠崖、梅園に萌芽を發し、蟠桃に大成したといふべきものであるかも知れないが、前二者は、

未だ世に公表して斷乎たる確信を示すに至らなかつたのである。それで自分は制禁の世に毅然として其確信を詳細に天下に發表した蟠桃翁を以て、眞に地動説の創唱者と稱する所以である。又自分は、前に蟠桃翁の該説唱道を以て其獨創でない、蘭學の影響であるといつたのは、上記諸氏が何れも皆蘭學系統の學者であるからである。

以上述べた所で、蟠桃翁の天文學、殊に地動説の概略は明かつたであらう。翁の學説は、舊に天文學に止まらず、他の方面に亘つて卓見が多い事は前にもいつた如くである。『大阪市史』にも、

夫れ徳川氏三百年間一毫人に資る所無くして、斷乎たる創見發明の説あるは、富永仲基の出定後語、三浦梅園の三語及山片蟠桃の夢の代三書あるのみ、仲基は大阪に生れ、蟠桃は大阪に長じ、而して梅園は麻田剛立の父綱齋の門に出でたれば、大阪に縁故無しとせず、關東の學者、概ね頭を四書五經に埋めて、一生の精力を消耗するに反し、關西には往々流俗を抜き、心を根底の疑問に用ゐたる者あり、甚偉とすべし（大阪市史卷二、四）

と評して居る。蟠桃翁の時代は、大阪に於ては、中井氏の懷德書院が設立せられて居て、盛んに市人の間に、此書院の學風を弘め、所謂平民教育には、大なる貢獻をなして居つ

たのである。翁も亦この門下生である。加之、由來大阪には純然たる町人で、其學倫を抜いて居る者が多い。翁の時代には、斯種の人物が輩出して居る。傘工橋本宗吉は、蘭學者であつた。質屋の主人間大業は、天文家であつた。酒屋店主木村蕨葭堂は、博物學者であつた。翁も亦之に類し、一の兩替屋の番頭で、漢學者にして蘭學に通じ、兼ねて天文學者及經濟學者であつた。而も此等の人々は、何れも時勢に迂ならず、實用の學を志し、各一旗幟を立て、其時代の學界に雄視して居るのは、大に注意すべき點である。今日の大阪市人に、此類の人物は餘り無い様である。翁の學は本來漢學であつたが、麻田剛立に従つて天文窮理の兩説を窺つてから、内外の學説を折衷して一種特別の實學者となつたと思はれる。翁は確に一世の偉人である。

三

以上述べた所で、山片蟠桃翁の事蹟の一斑は明かつたであらう。翁が東播の一僻村に生れ一商家の丁稚から身を起して、漢學に造詣深く、洋學に精通し、泰西の星學を研究して、當時本邦の學界に一新説を唱出し、尙財政經濟に力を盡して功績を遺し、時の政府から表彰せられた。殊に其主家に忠勤を抽んで、益繁榮ならしめ其身亦巨富の

富を贏ち得た事は、實に欽仰するに足るものがある。翁は精神界にも、物質界にも成功した人といはねばならぬ。學問も出來、富も造り、人物も偉大で、所謂三拍子揃つた人である。今日世上或一派の人士が渴仰して居る成金者でもある。斯る偉大な人物であつたに拘らず、從來其事蹟湮沒に歸して居たのである。今自分はこの不聞の偉人の逸傳を聊闡明して世に示すに至つたが、脱略遺漏尙多かるべしと思ふ。只自分は此偉人の逸傳の一曙光を世人に知らしめたならば、吾望は足るのである。昨秋自分は同郡の地誌大家平野庸脩翁の逸傳を公にした折、其結論の中に「米田村には、翁以外に故人で、尙一二不聞の有名なる人物があるが、此等の事蹟に至つては、他日更に發表の機があらうと思ふ。」と述べて置いたが、それは既出の平野翁以外栗本玉屑、山片蟠桃二人の事である。此三人共に人物であるのは無論であるが、平野翁は、播磨地誌の大家である。而も其著地誌書は餘業になつたものである。栗本翁は、一俳諧師である。然るに蟠桃翁に至つては、學は和漢洋を兼ねた一大實學者で、而も其本業は一商家の番頭である。其人物は非常に英邁で、智局が有つたのである。此三人の學術上の地位や優劣論は姑く措くとして、其人物の點から見れば、蟠桃翁は一頭地を抜いて居る様である。自分は凡ての點から觀察して、翁は徳川時代に於ける本邦の一偉人であると思ふ。又小にしては江

戸時代で、我印南郡出身の一大人物であると信ずる。斯る偉人の事蹟が、毫も其郷里でも、又其同郡の人にも知られずして、不聞に終つて居た事は、不思議に堪へぬ次第である。茲に今郷里を異にして居るとはいへ、其郡を同じうして居る自分が、此逸傳の一斑を公にするに至つた事は、心中に大に欣ぶ者である。近く我印南郡では、簡易印南郡誌」ともいふべき小學校用郷土誌が編纂せられる筈であるが、自分は曩に刊行せられた「印南郡誌」には、兩回の分共に、翁の事蹟が漏れて居るから、近刊の此郷土誌」には、必ず記載せられる様に、其編纂委員の人々に話し、其事蹟について聊述べて置いた。依て此郷土誌」には載せられる事と信ずる。曩に自分が平野庸脩翁傳を刊行し、今また山片蟠桃翁の事蹟を發表するに至つたのは、故人偉蹟顯揚の微意を表したに外ならぬのである。即ち淺學不敏の後進が、博學多識の先輩の遺業を追懷した衷心の表現である。只此蕪雜の文字が、先哲の偉蹟について其一端を叙述し得て居たならば、望外の幸である。終に臨んで、本篇起草に際し、友人文學士中熊直喜、同東條操二氏が、其資料蒐集について、便宜を與へられ、覺正寺住職藤田眞哲氏が、其寺寶の木杯並に過去帳の閲覽を許され、又神爪村高谷至明氏が、自分の實地踏査の折、東道の任に當り、種々幹旋の勞を取られた厚意に對して、自分は茲に謹謝の意を表する者である。完（大正七年二月五日稿）